
初投稿

切干大根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初投稿

【Nコード】

N1785R

【作者名】

切干大根

【あらすじ】

初投稿です。

稚拙な文ですが、ぜひご批評を下さい。

何歳の時のことだったでしょうか。小学生だったことは確かです。

帰り道に、ある夫人とすれ違いました。

学校からの、普段と変わらぬ帰り道です。

辺りは静かな団地、雑草だらけの草むら、錆びたガードレール、夕焼け。そんな中で、その夫人だけが異物的で、妙に浮き彫りにされてきました。

ただの夫人ではないのです。姿かたちをよく覚えてはいませんが、黒々とつやめく髪が腰のあたりまでうち流されていたのだけは覚えています。その時の私には理解のしようもありませんが、妖しさとも言うべきでしょう。斜陽がその髪の色を一層高めているようにした。

少年の私とその女は、一步一步、歩を進めることにお互い近付いて行きました。近づくごとに、私の心臓は鼓動を早めていきます。人とすれ違うだけ。そんなことは、いくら少年の短い人生でも幾度となく繰り返されてきたはずなのに、緊張、とでも言えばいいのか。その女に対しては空恐ろしさが募るのでした。

私はとうとう、つま先を見て歩きました。目を伏せて、猫背になって、ただその未知の嵐が過ぎ去るのを待っていました。

ふと、足音が響きました。私ではありません。女のです。

私は目線をその足音の方へやりました。そして、女を見ました。見てしまいました。

女と目が合いました。

女は私を見ていました。そうして笑っていたのでした。微笑みな

どではない。なにせ、恐ろしい。

それまで見たこともない笑みでした。母親にも、先生にも、同年代の友人にも、あらゆる女性に見たことの無い笑みでした。

口元はいかにも不自然に引き上げられ、そしてあの黒髪。

私は走り出していました。何が何だか分からないまま、その場から逃げだしました。

ただすくみ上がって、心臓が強く握られているような感覚に追い立てられて走りました。

走って、家に着いてから泣きました。自分の部屋で、怖くて泣いて、それからのことはよく覚えていません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1785r/>

初投稿

2011年10月8日19時19分発行